社団法人 日本アルゼンチン協会

Argentina
アルヘンティーナ

No. 53

プエルト・マデロ地区　ブエノスアイレス

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報　2009年2月

「地域割りで安心な牛肉を輸出したいです」
～ポルスキ大使会見記～ 1
故土屋会長を偲んで
――追想録 3
アルゼンチン大使館との73年の足跡（交流）..... 3
「少し変わったことをしようとすると」
～イレーネ賀集さんとの1時間～ 7
エビータ開棺録 8
フェルナンデス政権発足から一年 9
タンゴ名曲物語（5）..... 11
Resumen en castellano 13
協会の活動報告
～当協会土屋義彦会長ご逝去～ 15
～当協会事務所業務時間の変更～ 15
～滝波勇氏他叙勲される～ 15
イベントのご案内 16

「地域割りで安心な牛肉を輸出したいです」

～ポルスキ駐日大使会見記～

河﨑　勲

「日本では、なんと言っても懐石料理ですね。すばらしいです。材料が新鮮で豊富だし、香り・味・色、どれをとっても、『ああ、これは日本だな』と思います。ふぐ料理も好きです。毒？もちろん知っています。きちんとしたお店で頂けば安心だということも知っています。」

着任直後のインタビューでは、好みの日本料理として、しゃぶしゃぶ、寿司、てんぷらなどをあげていたが、長期の日本駐在で食の幅がぐっと広がった。

2004年5月に駐日大使として赴任、このインタビューの2008年12月現在で在任4年7ヶ月になる。

「飛騨の白川郷は感激しました。ホテルがないというので「ミンシュク」に泊めてもらいました。家内も一緒です。合掌造りの民家で他の日本人たちと一緒に囲炉裏を囲んで食事をしました。

言葉の壁を越えて人間同士の交流ということを満喫

しました。」白川郷を勧めてくれた日本人の友人が、「まさか民宿にまで入り込むとは思わなかった」とあとで驚いたという。京都、奈良、金沢を愛する。「古い日本のよさがあります。」金沢21世紀美術館には、アルゼンチンの若い芸術家が作ったプールの水の芸術があり、その斬新さにポルスキ大使はびっくりしている。金沢では、ピアソラ15回忌の記念音楽会も開かれている。

—住んでみた日本の印象は？

「うーん。Discipline(規律)ですね。社会の中で自分がどういう役割を果たすべきかを人々がよくわきまえているというのでしょうか。仕事とか、街の中とか、交通のあり方とか、みんなが自分のマニュアルを持って行動しているみたいですね。そして仕事には集中しています。」「しかし、若い世代の日本人は、社会に対する義務という面と自分の人生をエンジョイする面とのバランスをよく考えているようです。世代の違いはどこの国でもあります。」

—日本人は、グループ行動が得意だと言われますが？

「そのとおりだと思います。大使館の近くの有栖川公園で、たくさんの人がスピーカーの音に合わせてエクササイズをしている。（ラジオ体操のことらしい）ああいうことは、われわれの国ではないですね。」「でも、個人主義の強いアルゼンチンでも、ティームワークの要求されるサッカーとかバスケットボール、ラグビーは強いです。」

アルゼンチン・ビーフの日本への輸出交渉の歴史が長い。口蹄疫（アフトーサ）が障害になっている。

アルゼンチンの牛肉は、久しい昔から英国やアメリカなど世界の90ケ国に輸出されている。しかし日本は、牛肉に限らず、食の安全に関しては極めて厳しい国である。

「口蹄疫予防のため牛にワクチン消毒をしていること自体、病気がある証拠だと言ってきます。しかし今、広大なアルゼンチンを地域割りにして、全くアフトーサの出たことのない南緯42度より南のパタゴニア地方の牛肉を日本に輸出する可能性について日本の農林水産省と技術的な話し合いをしています。」アルゼンチン・ビーフの輸出交渉をもっと進めたいと、ポルスキ大使は決意を秘めている。

—この難しい世界経済の中で、アルゼンチンはどういう役割を果たして行くのですか？

「世界の経済の変動はダイナミックです。先行きの予測がつきません。それぞれの地域でそれぞれの国が苦しんでいます。経済大国のG8の話し合いだけで解決できるものではありません。G20が大事な役割をになうことになるでしょう。われわれの地域からは、アルゼンチン、ブラジル、メキシコがG20に参加しました。われわれが今なすべきことは、地域の中でバランスを保ちつつ工業化を進め、経済を安定させることだと思います。こういう時代には、話し合う、お互いがよく知り合うことが普段よりも大切だと思います。」

ダニエル・ポルスキ駐日アルゼンチン共和国大使

相互によく知り合うための基盤としてポルスキ大使は、文化交流の活発化を提唱する。

「この難しい時期に、伝統的な友好国 日本とアルゼンチンが交流を深めることが大切だと思います。両国は、観光の面で協力できるでしょう。文学では、日本には作家ボルヘスの研究会ができているし、アルゼンチンでは村上春樹が読まれています。琴の演奏がアルゼンチンで静かに受け入れられています。詩や写真、現代舞踊、それに映画の交流もありうるでしょう。」

ODAの枠で、日本とアルゼンチンは、中米ハイティや南米ボリビアで農業振興のための技術提供・財政援助で協力してきている。

「こういう協力をアフリカなどへ広げることができるのではないでしょうか。」

—交流の中にワインも入れましょうか？

「もちろんですとも。実は数年前からアルゼンチンワインが静かに日本に入ってきています。もう50銘柄くらいになっているはずです。他の国と違って、アルゼンチンのボデゲーロ（ワインメーカー）は、日本へは高級銘柄ワインの輸出を伸ばすことを目標にしています。

音楽の交流ももちろんです。が、タンゴはもうわれわれが手を出さなくてもね。」（笑）

（かわさき　いさお；当協会理事）

故土屋会長を偲んで

――追想録

木島　輝夫

昨年10月5日に逝去された土屋義彦当協会会長（元参議院議長、埼玉県知事）の自由民主党・土屋家合同葬儀が去る12月12日青山葬儀所において執り行われ、現職および歴代内閣総理大臣を含め2,000人の参列者がこの死を悼み、先生の徳を偲びました。

先生は5年以上にわたり会長をお勤めくださいましたが、その間地元埼玉に「埼玉・アルゼンチン友好協会」を立ち上げて当協会の仕事を応援してくださいました。アルゼンチンから要人が訪日した際は必ず懇談の機会をもち、またポルスキ・アルゼンチン大使を折にふれ川越や秩父にご案内されるなど常に日亜両国関係発展を願っておられました。更に先生は在アルゼンチン日系社会の人々に常に熱いまなざしを向けられ、日本人アルゼンチン移民史の編纂・刊行や在亜日系人老人福祉施設の建設などの為の資金集めに奔走されました。

12月22日には、ブエノスアイレス亜国仏教界において日系人団体連合会（FANA）による土屋義彦追悼会が厳かに執り行われたと聞いております。先生は夙に草の根外交の重要性を確信され、身をもってこれを実践された方であっただけに、葬儀には数え切れないほどの在京各国大使（他にパラオからは現職大統領がわざわざ来日）が参列しました。

民間外交として先生がとりわけ大切にされた国の一つがアルゼンチンでありました。生涯を通じて先生は地球の反対側にあるアルゼンチンを6回もご訪問になっています。最後は平成17年6月で、80歳にならんとする御身でありながら、コルドバにまで足を伸ばされたのです。アルゼンチン人との対話では「私はたったの6回しか帰国を訪問しておりません」と言うのが先生の口癖でしたが、通訳泣かせの表現でした。

先生の脳裏を決して離れることがなかったと思われるのは、アルゼンチンが日本人移民を受け入れてくれたことと併せて、一つには日露戦争に際しアルゼンチンから軍艦2隻を譲ってもらったこと、二つには第二次大戦後の困窮の時期にエバ・ペロン財団が大量の小麦を日本に援助してくれたことであり、先生がアルゼンチンを大切にされていた最大の理由もその辺に有るのではないでしょうか。

先生の座右の銘は「至誠通天」（吉田松陰の言葉、至誠天に通ず）ですが、参議院議員時代から現在に至るまで「真」の人であり、嘘・はったりのない、思いやりのある人でした。「彩のくに埼玉」のモットーのもと歴史に残る業績を残して埼玉県知事を引退された後は、草の根外交のために世界を駆け巡る傍ら、得意のハーモニカを懐中に忍ばせて国内の福祉施設慰問に尽くされたと聞き及んでいます。勲一等旭日桐花大授章という最高位の叙勲（平成11年春）を受けた大政治家でありながら、至極気さくに誰にでも笑顔で話しかけることの出来た偉大な人間、土屋義彦会長の死を悼むや切であります。

（きじま　てるお；当協会副会長兼理事長）

アルゼンチン大使館との73年の足跡（交流）

羽田　正美

今年は、日本アルゼンチン修好通商航海条約が結ばれてから110年目の記念の年になり、アルゼンチン大使を始めアルゼンチン大使館の皆様、（社）日本アルゼンチン協会の皆様並びに関係機関、関係者の皆様方にお喜びを申し上げます。

私たちの茨城県境町でも、モンテネグロ代理公使と郷土の野本作兵衛氏がアルゼンチン公使館で初めてお会いしてから75年目（モンテネグロ代理公使が境町立長田小学校に来校してから73年目）、長田小学校の毎年の学校行事「アルゼンチンの日の集い」が今年で20回目と節目の年に当たりました。そこで、今回、アルゼンチン共和国と長田小学校との歴史を振り返りたく貴協会の季刊紙に投稿させていただきました。

モンテネグロ代理公使と野本作兵衛氏の関係は、両

野本氏／モンテネグロ氏、両お孫さんの最初の出会い　1933年（昭和8年）

モンテネグロ氏来校　1935年（昭和10年）2月19日

氏の祖父同士がペリー艦隊来訪時に出会っていたことに遡ります。1853年ペリー艦隊が浦賀に来た時、今の境町、当時の関宿藩の祐筆であった野本作次郎氏が米国と幕府の会談の記録係を勤めました。この時ペリー艦隊に乗っていたのがアルゼンチンのモンテネグロ氏です。モンテネグロ氏は、帰国後子どもや孫たちに、「日本ではノモトというサムライに世話になった」とよく話していたそうです。外交官として日本に赴任した孫のモンテネグロ代理公使が、ノモトの孫の作兵衛氏に連絡を取り、孫同志の対面が実現しました。

昭和10年（1935年）2月19日、野本作兵衛氏との関係でモンテネグロ代理公使が初めて長田小学校を訪問しました。電話も車もない村では道路普請や店も並び大騒ぎになったそうです。その時外国語に堪能で応対したのが竹野内久校長です。竹野内校長のひ孫（？）が俳優として活躍している竹野内豊氏だと聞いています。モンテネグロ氏は本校の優等生5人に毎年100円の奨学金（モンテネグロ賞）を創設され、6年間続きました。その間、学校には当時珍しかったラジオ、カメラ、貝の標本、雛人形等を贈ってくれたそうです。モンテネグロ代理公使は本校に4回も訪問しています。その後、ポルトガルに転勤され戦争で途絶えてしまいました。

昭和40年（1965年）4月30日、交流30周年を記念して「モンテさんに感謝する会」が開催され、ギジェルモ・カーノ大使が長田小学校を訪問されました。カーノ大使はその時、「サルミエント賞」を約束され、全校児童に奨学状と硯箱が贈られました。サルミエ

ント賞のサルミエントとは、ドミンゴ・F・サルミエントというアルゼンチン大統領の名前です。肖像画は本校の「アルゼンチンの部屋」に飾ってあります。サルミエント賞はアルゼンチンで、教育に功績の高いサルミエント大統領にちなんで名付けられた賞です。そのような賞を頂戴したことは大変光栄なことです。

昭和62年（1987年）7月27日、近藤四郎日本アルゼンチン協会副会長（元駐ア大使）のご配慮により初めて本校PTA役員、石川治男校長等が赤坂のアルゼンチン大使公邸を訪ねました。その年の11月17日にエンリケ・ホルヘ・ロス大使が、長田小学校を訪れ、本校児童は歌や踊りで心からのおもてなしをしました。その後、野本作兵衛氏宅を訪れました。野本作兵衛氏は、所有していた鈴木貫太郎閣下（終戦時の内閣総理大臣。日露戦争の1年前、アルゼンチンから譲渡された装甲巡洋艦日進（モレノMoreno）にジェノア（イタリヤ）から横須賀まで回航監督官として乗艦された。）の孝子未亡人が描いたボタンの花の絵をお土産に渡されました。（野本作兵衛氏は日頃から鈴木貫太郎閣下の自宅を訪問していた。）

昭和63年（1988年）3月30日、「アルゼンチン共和国大使館公邸庭石寄贈依頼書」を持参し、ロス大使に提出し快諾を得ることができました。そのお陰で、大使公邸の庭石をアルゼンチン共和国と長田小学校との「友好記念の碑」とすることができました。（写真参照）

昭和63年（1988年）6月2日、ロス大使の参列のもと「アルゼンチン共和国と長田小学校との友好記念之碑」の除幕式と記念式典を挙行することができました。これを記念して毎年、6月2日を「アルゼンチン友好の日」と定め、平成元年から学校行事としてスタートしました。今年（平成20年）が20回目になるわけです。

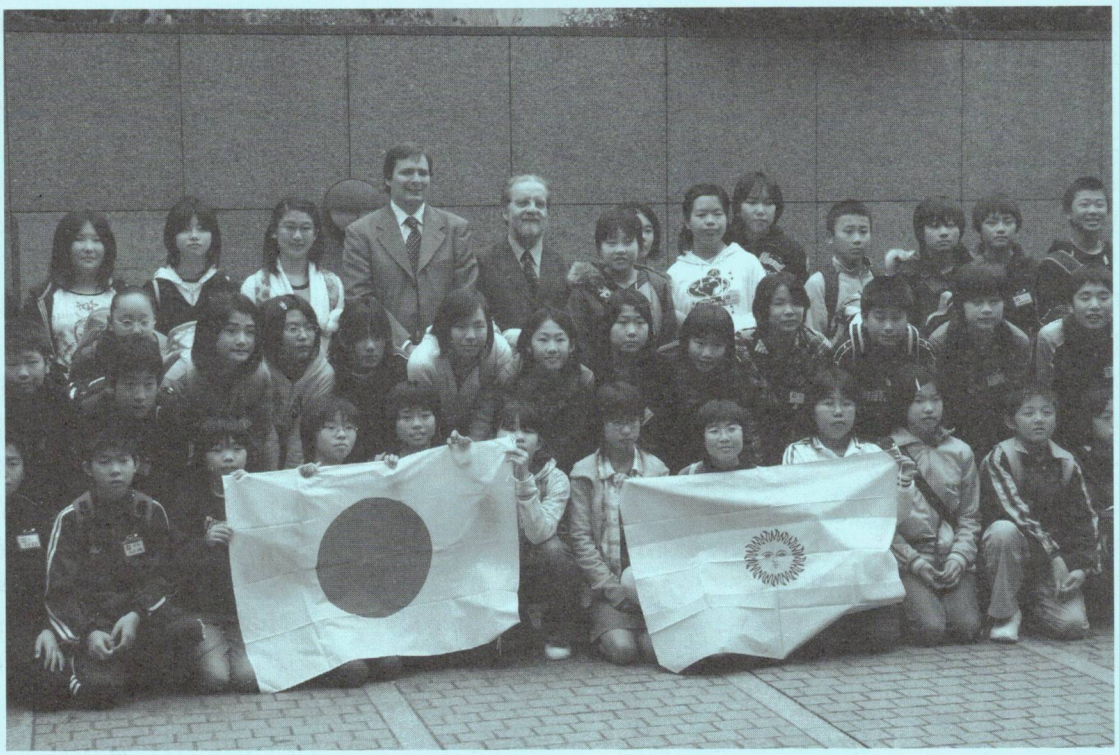
平成7年（1995年）6月23日、100歳の誕生日を迎える野本作兵衛氏に長年にわたるアルゼンチンとの友好に寄与したとしてアルゼンチン政府よりマーヨ勲章（等級シュバリエ）が叙勲され、ホセ・サンチス・ムニョス大使から伝達されました。長田小学校の児童は名曲「CAMINITO（カミニート）」を歌って、大先輩の誕生日を祝福しました。

平成10年（1998年）2月17日～2月24日、アルゼンチン大使館主催で日本・アルゼンチン修好100周年記念『長田小学校児童絵画展』（長田小学校全児童を対象に行った絵画コンクールで日ア友好親善をテーマにした絵画展）がこどもの城（東京都渋谷区）にて開催されました。応募作品の中から、受賞作品、優秀作品が展示されました。金賞受賞者の関真理奈（3年生）さんには、イベリア航空・アルゼンチン航空のご厚意によりアルゼンチン往復チケットが授与され、夏休みに親子でブエノスアイレス日ア学院（真木信明理事長）等アルゼンチンを訪問させていただきました。

平成10年（1998年）6月6日、第10回「アルゼンチンの集い」が行われました。ムニョス大使ご夫妻が来校されました。この年は、「日本・アルゼンチン修好通商航海条約」が百周年目の記念の年に当たり、長田小学校でも盛大にお祝いをすることができました。お礼に奥様（Polly Ferman）のすばらしいピアノ演奏を聴くことができました。その模様はNHKで放映され（日本アルゼンチン協会河崎勲理事のお陰で）、多くの新聞社でも取り上げてくれました。

平成10年（1998年）12月2日、東京の帝国ホテルで「日本・アルゼンチン修好100周年記念式典」が行われました。式典終了後の「記念レセプション」の席に、長田小学校の児童代表57人が招かれました。メネム・アルゼンチン大統領、秋篠宮殿下・同妃殿下等多くの出

友好記念の碑



6年生大使館訪問

席者の前で、大正琴演奏、日本の名曲「さくら」の合唱、アルゼンチンの名曲「CAMINITO（カミニート）」をスペイン語で歌いました。割れるような拍手の中、メネム大統領が金屏風の前から指揮者の麻生真貴子さんのそばに歩み寄り、微笑みと共に白い包みを贈りました。メネム大統領の贈り物は、「5月の太陽」と呼ばれる中央の微笑む太陽が、金の糸で刺繍された豪華なアルゼンチン国旗（リボン付き）でした。この贈られたアルゼンチン国旗は、日本には、アルゼンチン大使館と長田小学校にしかない国旗と聞いています。この国旗を長田小学校の宝物として、学校旗と同様に永久に保存していこうと考えています。

平成11年（1999年）11月30日（秋篠宮殿下のお誕生日）、ブエノスアイレス日ア学院にて、「秋篠宮文庫」創設式が行われました。B・グティエレス・ウォーカー文化庁長官、M・ジャノニ市教育局長、渡部和男公使、阪田マリオ亜日修好百周年記念事業委員会元委員長、野村秀治日本アルゼンチン協会専務理事等多数の来賓が出席された中で、長田小学校からも代表4人（野本仁・真友親子、小口芳一・真奈親子）が参加させていただきました。（野本仁様は野本作兵衛氏の孫、小口芳一様はPTA副会長）

平成16年度から現在のダニエル・D・ポルスキ大使になり、毎年開催している「アルゼンチンの日の集い」に、5年連続で来校して頂いています。歴代大使の中で一番数多く訪問して頂いているので、特にポルスキ大使には、深く感謝申し上げます。

平成18年度の「アルゼンチンの日の集い」の場で、ポルスキ大使からアルゼンチン大使館への招待を受け、平成19年2月7日、初めて6年児童が大使館を訪問することができました。18年度だけでなく、これからも大使館訪問が継続できますようお願いしましたところ、ポルスキ大使の快諾を頂くことができました。今後、新たな行事として大使館訪問を続けていきたいと考えています。

平成19年度6月に実施した第19回「アルゼンチンの日の集い」では、ポルスキ大使がチャランゴ（アンデスの弦楽器で、昔はアルマジロで作られた。ギターよりも高音部が高く、哀愁を帯びた音色を出す。）の有名な演奏者を連れて来ていただき、ミニ演奏会を開くことができ、すばらしい行事となりました。

平成20年8月8日、アルゼンチン海軍練習艦の帆船「LIBERTAD（リベルタ号）」が10年ぶりに横浜港に寄港するということで、ポルスキ大使の計らいで5年生の児童を連れて艦内見学をすることができました。アルゼンチン大使館との交流のお陰で、普段経験できない貴重な体験をさせてもらうことができました。

茨城県で長田小学校と言えば「アルゼンチン」というくらい有名で、学校の自慢の一つです。

是非、今後もこの交流が末永く続くことを切にお願い申し上げます。

（はねだ　まさみ；茨城県境町立長田小学校長）

「少し変わったことをしようとすると…」

～イレーネ賀集さんとの1時間～

河﨑　勲

日本アルゼンチン協会のボランティア活動で、会報のスペイン語レジュメの頁を毎号担当している。

ブエノスアイレスで生まれ、大学を出たあとアルゼンチンの弁護士をしていた。父は日系二世、母は日本人。祖父は、エスコバルを花の栽培地に仕上げた著名な賀集九平氏である。家の中では日本語で育ったが、日本に留学してきた時は漢字の読み書きができなくて困った。

「今は、日本語で話す時は日本人だし、アルゼンチンでいとこ達とスペイン語で話すときはアルゼンチン人です。自分のアイデンティティーで悩んだことは一度もありません。」

物事の整理能力が抜群の人である。多分場面場面でさっと頭を切り替えるのだろう。

「東京もブエノスアイレスも世界の大都会はどこへ行ってもライフスタイルは同じですけれど、日本のよいところは何と言っても安全なことですね。夜でもどこでも一人で歩ける。こういう町は珍しいです。それに時間がきっちりしています。」

「日本の町でカップルを見ていて変だなと思うのは、男性が腕をだらんと下げたまま女性がそれに掴まるようにして歩いています。きちんと腕を組まないのですね。レストランでも女性が男性に食べるものを取り分けてあげている。あれはアルゼンチンでは逆ですね。」

女性の地位を比較すればという質問には、アルゼンチンでも社会活動とか家事の分担とかではまだ男性の方が優位ですと残念がっている。

日本にいて感じることの一つは、人と変わったことをすると嫌がられることだという。レストランのコース料理のうちの一皿だけを別のものに変えてもらおうとすると小波が立つ。「そんなことをしない方がよいよ」と日本人に言われる。着るものも自分の好みでと思うが、売っているものはみんな同じ色で同じタイプ。「少し人と変わった事をしようとすると嫌がられますね。」

今、NHKの国際放送でスペイン語圏向けのニュース・コメントの翻訳をし、アナウンスもしている。

製作会社のアニメ作品などの翻訳も手がける。「日本は翻訳家の地位が低くて仕事が安定しませんね。」

「旅が生きがいなんです」という。世界中をまわった。永住するとすればクアラルンプールかジンバブエだと思っていたが、今はパプアニューギニアに魅せられている。現代文明に染まっていない素朴で善意の人々、

イレーネ賀集（がしゅう）さん
当協会理事 弁護士 写真家 翻訳家

木登りカンガルーや極楽鳥などの特有の生き物、温暖な気候、豊富な食料と資源。この7年間に7回訪れ、山奥の民家に泊めてもらい写真を取りまくっている。写真家としては個展も開いている。この2月には新宿で、パプアニューギニアの人々、風習、風土を紹介する個展を開く。

駐日アルゼンチン大使館の参事官であった父親が50年前に撮った東京の街角の写真と、50年後に自分が撮った同じ場所の写真を並べる展覧会をいずれ実現させたいと夢見ている。

「シンプル・ライフ・イン・パプアニューギニア」

2009年2月3日（火）～2月12日（木）
会場　コニカミノルタプラザ　新宿高野ビル4階
10:30～19:00（最終日15:00まで）
無休 / 入場無料

（かわさき　いさお；当協会理事）

エビータ開棺録

成田　仁

「事実は小説より奇なり。」

ペロン大統領夫人で、実質副大統領的存在であったエバ・ペロンの生前の活動は広く世に知られるところであるが、彼女の死後のミステリーは、まさに「事実は小説より奇なり」である。

私が社費留学生として、初めてブエノス・アイレスに赴いたのははるか昔の1965年のことであった。このときは、すでにエビータの遺体が一夜にして忽然と煙のごとく消えてしまった後で国民は、その謎を追って大騒ぎしていた時であった。以来一度もアルゼンチンに勤務することなく2000年にスペインで定年を迎え、それを機に妻とともにおよそ40年ぶりにブエノスを訪れ、エビータの墓とペロンの墓に、懐旧の念をこめて花を添えた。

ペロン大統領の妻であり、副大統領であるエバ・ペロンは1952年7月26日、子宮癌で死亡した。その前後の様子は「アルゼンチンよ泣かないで(Don't Cry For Me, Argentina)」のミュージカル・ソングで知られる。当時ペロン大統領と敵対関係にあったアメリカから専門医が手術のため呼ばれたがエビータの病状は医術の枠を超えていた。33歳での死はキリストの死の年齢に重なることもあって、エビータを聖女に列せんとする運動も興った。

一方、エビータを不滅の象徴とすべく、当時遺体保存技術では世界一といわれたアラ博士が急遽スペインより招かれた。博士は遺体から血液を抜き取り、グリセリン、ホルマリンをベースにした人造血液水を注入し、体の表面にはプラスチック・コーティングを施した。アラ博士は「今から100年後に取り出しても死んだときのエビータとまったく変わっていない筈だ。」と自信の程を語った。

1955年軍部とカトリック教会が反ペロンに転じ、ペロン大統領はバチカンから破門された。ついで、軍部の反乱が起こり、ペロン大統領はエビータの遺体を残したまま、フランコ将軍の庇護の下、スペインへ亡命した。反ペロン派軍部出身のアランブル将軍が大統領となり、ペロン派への粛清を開始した。しかし、大問題の一つはエビータの遺体の処理であった。エバ・ペロンを熱愛するペロニスタたちは命懸けでCGT本部に安置されていたエビータの棺を守っていた。困ったアランブル大統領は側近のクーニング陸軍情報部長官に遺体処理を一任した。クーニング長官は直ちに特殊コマンド・チームを編成し、ある深夜CGT本部に侵入し、エビータの遺体を盗み出し、陸軍情報部の自分の部屋の屋根裏へ隠した。翌日、一夜にしてエビータの遺体が掻き消えたことを知った国民が大騒ぎしたことは想像に難くない。一方、エビータの遺体とともに暮らすコマンド・チームは徐々に精神に異常をきたし出し、部下の一人は発狂し妻を射殺してしまい、クーニング長官も自宅が爆破される事件に巻き込まれ、娘が重症を負い、クーニングの精神は病んだ。大統領はクーニングに対し、早く遺体を埋葬せよと命じたが、彼はエビータの遺体を手放すことを拒否し、罷免されるに至った。進退きわまったアランブル大統領は、あるイタリア人神父に処置を頼んだ。

1956年のある深夜、3個の棺がヨーロッパ行きの船に積まれた。一つはドイツ行き、一つはベルギー行き、あとのひとつはイタリア行きで、そのどれかにエビータの遺体が入っていた。真の行方はイタリア人神父のみぞ知るで、神父は埋葬場所をメモにし封印の上、アランブル大統領に提出した。しかし大統領は開封を拒否した。知ればペロニスタに誘拐され拷問されることを恐れたためである。

彼の恐れはやがて現実となり、1970年、アランブルは大統領の職を去っていたにもかかわらず、極左グループに誘拐された上、拷問された。彼は本当に、棺の行方をしらなかったが、処刑された。彼の遺体も、その先、盗み出されるという、二重の悲劇に直面することになる。次の大統領フロンジシも、その次のイリアも開封することはなかった。同じ恐れを抱いたからである。

親ペロニスムのラヌッスが大統領になった1970年の暮れ、彼は初めて、メモを開封した。そこには、「ミラノのマジョーレ墓地41-86号にマリア・マギ・デ・マジストリなるイタリア人女性名で埋葬されている。」と記されていた。実在の人物で遺族もいた。ラヌッス大統領は直ちに秘密特別チームを編成し、ミラノに派遣し、遺族からの発掘申請書を偽造し、まるで生きているごとく保存されているエビータを回収した。遺体は直ちに、マドリッドの最高級住宅地プエルタ・デ・イエロに亡命中の夫ペロンの館へとフランスを突っ切り車にて運ばれた。1971年9月のことで、ペロンは16年ぶりに妻の遺体と対面した。エビータの遺体保存処置をしたアラ博士は引退してマドリッドに住んでいたので、合流した。エビータの遺体はわずかに髪のほつれがあった程度で、生きているような美しさを保っていた。

1973年、ペロンはアルゼンチン大統領に返り咲いた。しかし、その翌年、ペロンは気管支炎にて死去した。エビータの遺体は、まだ、マドリッドにあった。エビータの遺体は1974年、18年ぶりに故国アルゼンチンに戻った。ペロンの後妻イサベルが大統領に昇格して、二人の遺体をオリーボスの教会に並べて安置した。しかしこの二人の安寧は短かった。二人が一緒の墓に入ることは認められなかった。エビータは貴族などのブエノスアイレス最高級墓地のレコレータ（Recoleta）に埋葬され、ペロンは一般墓地のチャカリータへ埋葬された。

二人が、別々に埋葬されてから11年後の1987年6月の、とある深夜、ブエノスの漆黒の闇の中、複数の人間がペロンの墓の天窓を破り墓に侵入した。ペロンの棺を開け、両腕を切断して持ち去った。誰が、何の目的で、いまなお真相はアルゼンチンの深い闇の中に消えたままである。

註……本稿は「如水会会報」2008年4月号に掲載されたものを一部加筆修正したものである。

参考文献
「聖女伝説」　原書房
「エビータ」　あすなろ書房
「エバペロン　美しき野心」　新潮社
「Las manos de Peron」　Norma

（なりた　ひとし；当協会賛助会員、元三井物産）

フェルナンデス政権発足から一年

～アルゼンチン政治経済短信～

荒尾　保一

昨年12月10日、クリスティーナ フェルナンデス デキルチネル大統領が就任してから、丁度一年が経過した。この一年間、農牧ストや世界金融危機など極めて困難な事態が発生した。フェルナンデス大統領は、選挙において45%の支持を得て大統領に選ばれたが、今日では28～35%の支持に止まっている。この間の主な出来事を振り返ってみよう。

(1) 農牧問題の波紋

2008年3月、政府の穀物の輸出に対する課徴金を引き上げるとの経済省令が発表されると、農牧業者は一斉にストに突入した。このストは、中断期間130日間（中断期間を含む）に及ぶ前例のない大規模なものであった。

この課徴金引き上げを定めた経済省令第125号は、国会の承認を受けることとなり、下院は賛成129票対反対122票の僅差で可決した。

一方、上院は、7月17日早暁、本件について採決を行い、賛成36票、反対36票で可否同数となり、議長の決するところに委ねられた。副大統領であり、かつ、議長であるフリオ コボス氏は、良心に従って判断したと演説した後、「私は政府案に賛成できない」と述べ、政府案は否決された。政権内の副大統領が政府提出の承認案を否決するという異例の結果となった。

この決定により、穀物の国際価格の変動に応じて税率が変動する課徴金制度は、3月の改正以前の状態に戻ることとなった。

この農牧問題の波紋は、後々まで残ることとなった。100日余のストによって、経済活動の停滞は避けられず、2008年第2四半期の実質GDPは、前年同期比7,5%の増となり、この5年間で下から2番目の低い水準となった。

7月末には、キルチネル政権以来内閣の首相を務めてきたアルベルト フェルナンデス氏が、大統領が政権の一新をできるようにと辞任を申し入れ内閣を去った。しかし、他の閣僚の入れ換えは行なわれず、新首相に36歳のセルヒオ マッサ氏（前ティグレ市長）が任命された。

この農牧ストを巡る一連の動きは、政権への信頼度を低下させる結果となり、フェルナンデス大統領の支持率は、世論調査によれば、最低時は20%にまで低下した。他方、法案を否決したコボス副大統領は、農牧業界から高い評価を得たことは当然として、一般市民からも支持を得て支持率は71%に達した。同氏に対して辞任を求める声が与党内から出たが、自分は選挙で選ばれた以上その責務を全うするとして副大統領職に止まっている。

(2) 公的債務の支払と再編

(イ) 国債の買戻し

フェルナンデス大統領は、8月、2008年及び2009年に期限の到来する国債について、政府が買戻しを行なうと発表した。この措置は、市場で国債の価格が11%

～13%下落し、カントリーリスクも2001年3月の水準まで下落したことに対応して、亜国の支払能力に対する不安を一掃することを狙いとするものであった。

(ロ) パリクラブ債務の返済

更に、9月初め、カサロサーダ（大統領官邸）で開かれた産業の日の式典において、2001年以来支払が停滞している亜国政府のパリクラブメンバー国に対する債務67億ドルを全額返済すると演説した。この返済には、先にIMFに対し借入額全額を一括返済した際に行なったと同様に、亜国中銀が保有する外貨準備が充てられることとなっている。

パリクラブのメンバー国は19カ国で、日本、ドイツ、オランダ、イタリア、スペイン及びアメリカの6カ国で全体債務の87%を占めている。この式典に参加していた企業家、組合の代表者は、フェルナンデス大統領の突然の発表を聞いて驚き、やがて大きな拍手を送ったと伝えられている。これにより、対外的に亜国の支払能力を示し、新しい国際融資や直接投資の呼び込みを図ったものとみられる。

その後、国際金融危機の発生により、亜国中銀の外貨準備を保有する必要があるとの理由からこの返済構想は棚上げになるとの報道もあったが、パリクラブにおいて、返済金額の確定などの作業は継続されていると伝えられている。

(ハ) ホールドアウト債務の再編

9月下旬、フェルナンデス大統領は、国連総会出席のためニューヨークを訪問した際、ホールドアウトになっている亜国債務について、再編成に応ずる意向を示し注目を浴びた。この債務は、2005年に当時保有していた債務に着き極めて低い交換比率で返済に応ずることとし、これに同意しない債権者には将来に亘って再交渉はしないと宣言した債務である。

このホールドアウトとなった債務については、再交渉を禁ずる法律が制定されている。このため、再編のアイデアは、シティー銀行など3行が提案しこれを大統領が評価するという形をとっている。従ってこの構想が実現するためには、上記の法律を廃止することが必要となる。

その後、ブエノス アイレスで大統領と3行代表が協議し、作業手順についての合意がされたが、世界金融危機の影響を受け作業は進展していない。

(3) 民間年金基金の国有化

世界金融危機の影響により、メルバル指数は大幅に下落し、対ドル為替レートも3,4ペソ/1ドル程度まで低下しした。このような状況の中で、フェルナンデス大統領は、メネム政権時代に発足した民間年金基金（AFJP）を、国家社会保障機構（ANSES）が管理する公的年金と統合し、「アルゼンチン統合年金制度（SIPA）」とすると発表した。AFJPには、約45万人が加入しており、年間150億ペソの保険料収入がある。この基金は、国債の購入や外債の購入などにも使用されているが、ブエノス　アイレス証券取引所の大口投資家でもある。これが国家管理の下に置かれると、証券取引に大きな影響が出るとして、発表の翌日には株価が10%も暴落した。

フェルナンデス大統領は、このAFJPの国有化の狙いは、最近の株価下落により同基金の収益性に疑問が生じ年金支払の不安が生じたためであると説明しているが、本当の意図は、民間の年金基金を政府の意向を直接に反映できるSIPAに吸収することにより政治目的に使用しようとするものではないかとの批判が強く出されている。また、私有財産の保障という観点からも問題があるとされ、国会の審議が注目されていた。

下院は、14時間の及ぶ長い討論の後、賛成162票、反対75票、棄権19票の大差で政府提出法案を可決した。当初は、穀物課徴金制度の国会審議同様に、賛否相半ばするのではないかとの観測もあったが、大差で可決された背景には、キルチネル前大統領がキルチネル派幹部に強力に働きかけたことが功を奏したとみられ、改めてキリチネル前大統領の実力が見直されている。

引き続き上院では、賛成46票、反対18票で可決され、メネム政権の時代に発足した民間基金は、14年ぶりに姿を消すこととなった。

(4) 世界金融危機への対応

9月以降の世界金融危機は、亜国経済に対し当然のことながら大きな影響を及ぼしている。当初フェルナンデス大統領は、亜国への影響は限定的であるとの強気の見方を示していたが、国内消費及び輸出の減退、雇用情勢の悪化などから、亜国経済の危機を認めざるを得なくなった。国会で承認を受けた政府予算においても、2009年度の成長率を4%と見込んでいる。

11月末、フェルナンデス大統領は、総額710億ペソ（約2兆1000億円）に上る総合経済対策を発表した。これにより36万人～77万人の雇用の創出を見込んでいる。更に、消費増進のための低利融資など様々の対策を打ち出している。

また、経済危機打開のためには、生産的な産業構造の構築が重要であるとの観点から、生産省を新設した。

(5) 外交活動

フェルナンデス大統領は、11月ワシントンで開催されたG20緊急首脳会合（金融サミット）に出席した。世界経済の課題解決のためには、従来のG7では不十分であるとの認識からG20会合が開かれたと考えられるが、アルゼンチンがそのメンバーに選ばれたことの意義は大きいと思われる。

同大統領は、これに引き続き、エジプトなど北アフリカ4カ国を訪問した。また、ロシアを訪問し、メドベージェフ大統領、プーチン首相と首脳会談を行なった。この際ロシアのルークオイル社のアルゼンチンへの投資に関する覚書が署名された。

また、ブエノス アイレスでメキシコ カルデロン大統領一行の訪問を受けた。

一連の外交活動の中で、ブラジルとの関係が改善されていることが注目される。

フェルナンデス政権の政策に対し、野党ではこれを批判する意見が強い。急進党、市民連合などの中には、野党が大同団結することが重要であるとの認識から会合がもたれたが、意見の集約には至っていない。2009年には中間選挙が行なわれるが、与野党間の対立の中で、経済危機に如何に対処してゆくか今後の対応が注目される。

（あらお　やすいち；当協会常務理事）

タンゴ名曲ものがたり（5）

～レクエルド Recuerdo ～

石川　浩司

レクエルド「想い出」はオスバルド・プグリエーセの代表作の一つである。もう一つの代表作「ラ・ジュンバ」は全曲リズムの塊のようなタンゴで、終生ダンス愛好家とともに歩んだプグリエーセの本質を体現する作品であるのに対し「レクエルド」は優雅にして美麗かつ哀愁感あふれる作品で、特に日本のタンゴ・ファンにとっては、これこそプグリエーセの代表作とする思いが強いようだ。

オスバルド・プグリエーセは1905年（明治38年）12月2日、ブエノスアイレスに生まれた。父親のアドルフォは家業の傍らアマチュアでは結構知られたフルート奏者で、オスバルドの兄弟たちもいろいろな楽器を演奏する音楽一家だった。しかし生活は厳しくオスバルドは十代なかばから映画館や酒場・踊り場などでセミ・クラシックやちょうどそのころから流行し始めたタンゴを演奏して生活を立てねばならなかった。

1923年（18歳）のある夜、そのころの演奏場所の「ラ・チャンチャ」という店へ通う市電の中でアイデアが浮かんだのが「レクエルド」のモチーフだったという。翌年この曲はオスバルドの母親の従兄弟であるファン・ファバの楽団によって初演されているが、ファバは無名の存在であったためか話題にもならなかったらしい。その後プグリエーセはもう少し有名なエンリケ・ポジェット楽団に入り「レクエルド」もそのレパートリーに加えられた。この楽団はラバージェとタルカウアノの角にあった「エル・パルケ」というカフェに出演していたが、このとき当時飛ぶ鳥を落とす勢いのフリオ・デカロ楽団のバンドネオン奏者ペドロ・ラウレンスが来て「レクエルド」を聴いて大いに気に入り、その楽譜を御大デカロに届けた。デカロもこの曲の魅力を見抜いて1926年12月このタンゴをビクターに録音したのである。これによって「レクエルド」は一躍世に知られるようになった。

このタンゴは三つの主題から成っている。第一主題は力強くロマンチック。第二主題は一転して深淵の中で聴く者に語りかけるような旋律。そして第三主題はリズミックで通常はここに華麗なバンドネオン・バリエーションが展開される。

この曲には全編にわたって歌詞も付けられている。作詞者は当時タンゴの司会者として活躍していたエドゥアルド・モレーノという人である。本格的詩人の作ではないので、その文学性はとるに足らないが、芸能司会者というのはその場の雰囲気を盛り上げるプロであるから演奏前や歌手が居ない時に楽団演奏をバックにこの詩を吟唱したりするにはよく出来ている。

(1) きのう詩人たちは歌い、オルケスタは泣いた。ロマンチックな愛のここちよい宵に。傷つきやすい青春の放浪が女の魅惑にとらわれて南の酒場に夢を踏みにじったとき、夢は燃え尽きその歌は途絶えた。

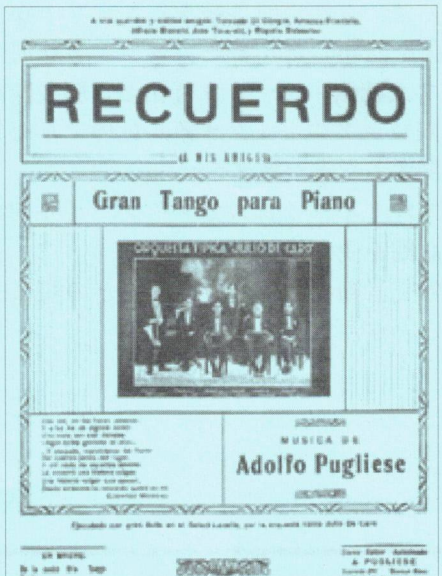
(2) わが最上の詩のひとよ。私は愛を知らなかった。許したまえ、もしもきみが我が理想の栄光だとしても、きみは我が最初の詩となるだろう。

(3) 酒場の声は永遠に消し去った。
愛に歌った比類なきメロディを、金髪のやさしいミミはパリを夢みて、その歩みには古いカフェのあの若者たちの栄光が蘇るだろう。
過去の手によって南の街のカフェの古いテーブルに彼女の名前は刻みつけられた。そこへ、ちょうど昨夜、ひとりの影が戻って来た。傷つきやすい青春の想い出と、女の忘却の香りとともに、愛もなく眠りこけてしまったきのうのカフェに・・・

最近ではこの歌詞が歌われることはほとんど無いが、古いレコードでは特に第二主題に対応する（2）を短く歌っている例がある。

ところで「レクエルド」の初期の楽譜表紙をみると作曲者が父親のアドルフォの名前になっている。これはどうしてなのだろうか？プグリエーセ自身が後に語っているところでは「当時私は未成年だったし、それに父親は貧乏していたので印税が父親に渡るように仕掛けたのですよ」という。しかし、このことは意外な嫌疑をかけられる原因となった。「レクエルドはオスバルドの作品ではない」というのである。その説によれば「オスバルドには行方不明になった兄が居り、この曲はその兄の作品なのだ。それが証拠に、この曲はオスバルドの他の作品とは全く作風が異なっている。

写真はビジャ・クレスポの交差点に立つプグリエーセの胸像。傍らに手を添えているのはリディア未亡人



ところがこの曲が突然ヒットし楽譜を出版することになったが、本当の作曲者である兄が所在不明であるため父親名義で発表したのである」というのだ。真偽のほどはわからないが、その後出版された楽譜やレコードでは作曲者はすべてオスバルドとなっており「レクエルド」はオスバルドの代表作の一つとしてその地位を確立している。一歩譲ってこのタンゴが兄の作品であるとしても「生みの親より育ての親」でオスバルドが手塩にかけて育てた功績は揺るぐことはない。

プグリエーセがこの曲を初めて録音したのは1944年でかなり遅い。この時はこの曲を最初に録音したフリオ・デカロ楽団のアレンジにほぼ準拠（1主題を省略）した形で演奏している。その後プグリエーセは編曲を全面改訂し歌曲として時の専属歌手ホルヘ・マシエルに歌わせた。1965年の初来日の時にはこのスタイルで演奏されたのでお聴きになった方も多いだろう。（録音は1966年）しかし、1968年にはマシエルはセステート・タンゴの一員として独立したので、この時点からはまた器楽曲として演奏されるようになった。有名なコロン劇場での演奏会や1989年の最終日本公演ではこの形で演奏されている。

さすがに名曲中の名曲だから、この曲をレパートリーにし録音もしている楽団は数多いが、一番の出色はオラシオ・サルガン楽団の演奏だろう。サルガンは有名なバンドネオン・バリエーションを自らのピアノに置き換えて演奏しているのが印象深い。

個人的に懐かしいのは昭和20年代の末に「クリスマール」というレーベルから発売されていたクリストバル・エレーロス楽団の演奏である。この曲のレコードを初めて買ったわけだしディアスという歌手が歌う第二主題がとても印象に残っている。

面白いと思ったのは1976年に来日したロス・レジェス・デル・コンパスのバンドネオン奏者たちによる

4重奏。リーダー格のアティリオ・コラールが若いころ覚えたものらしかったが、なにしろこの楽団はダリエンソ楽団の残党たちで編成され、徹底してダリエンソ・スタイルを貫いていただけに余興であったのかもしれないがまさに意表を突かれたという感じであった。

その他にもこの曲のレコードは数が多いし、我が国のタンゴ楽団もほとんどこの曲をレパートリーにしているだろう。ダンスにも好適なのでダンス・パーティでもよく耳にする。聴いてよし、踊ってもよし。このあたりがこの曲の魅力と言えるだろう。

（いしかわ　ひろし：当協会理事）

Resumen en castellano

por Irene Gashu

Quisiera exportar carne argentina segura (p. 1)

por Isao Kawasaki

Entrevista con el Embajador Daniel Polski. Quedó muy impresionado con Shirakawa-go donde se alojó en un minshuku con su Sra. Los japoneses jóvenes han encontrado un equilibrio entre su trabajo y su vida privada. Al sur del paralelo 42 en la Patagonia, no se han dado casos de aftosa por lo que sería deseable exportar a Japón carne vacuna procedente de esta zona. En esta crisis económica mundial, lo importante es conversar y conocernos; para ello nada mejor que el intercambio cultural.

Recordando al Presidente Yoshihiko Tsuchiya (p. 3)

por Teruo Kijima

El 5 de octubre pasado falleció el Sr. Yoshihiko Tsuchiya, Presidente de nuestra Asociación (ex Presidente del Senado y ex Gobernador de la prefectura de Saitama). Unas 2.000 personas asistieron a su funeral. Fue nuestro Presidente por más de 5 años. Fue un gran político, pero además, tenía un carácter muy sociable. Siempre con una sonrisa en sus labios.

73 años de amistad con la embajada de Argentina (p. 3)

por Masami Haneda, Director de la Escuela Primaria Nagata

Han transcurrido 73 años desde que el Viceministro Arturo Álvarez Montenegro visitara la Escuela Primaria Nagata de la ciudad de Sakai-machi, prefectura de Ibaragi. Además, en 2008 se celebró por vigésima vez el Día de Argentina en dicha Escuela.

Hace 75 años, el Viceministro Montenegro y el Sr. Sakube Nomoto, nacido en Sakai-machi, se encontraron por primera vez en la representación diplomática argentina en Japón. La relación de ambos se remonta a 1853 cuando la Armada de M.C. Perry llegó a Uraga, Golfo de Edo (actual Tokio). Sus abuelos se conocieron en ese entonces. Dicen que cuando el Sr. Montenegro regresó a Argentina, con frecuencia contaba a sus hijos y nietos que en Japón había trabado amistad con un Samurai de nombre Nomoto.

El 19 de febrero de 1935, el Viceministro Montenegro visitó la Escuela Nagata. Fue recibido por el Director Uchihisa Takeno. En esta oportunidad, el Viceministro Montenegro creó una beca por la que cada año se entregaron 100 yenes a los 5 mejores alumnos de la Escuela Nagata. Esta beca continuó durante 6 años. Además, la Escuela Nagata recibió otros regalos importantes como una radio, una cámara, una colección de caracoles y muñecas Hina. El Viceministro Montenegro visitó la Escuela Nagata 4 veces. Luego fue trasladado a Portugal y al iniciarse la Segunda Guerra Mundial, se cortó la comunicación.

El 30 de abril de 1965, se realizó en la Escuela Nagata un "Encuentro para Agradecer a Monte-san" con la asistencia del entonces Embajador Guillermo Jorge Cano. Se otorgó además el Premio Sarmiento y se entregaron diplomas y cajas con pinceles para escribir, a todos los alumnos.

El 27 de julio de 1987, gracias al Vicepresidente de la

Asociación Nipo-Argentina y ex Embajador de Japón en Argentina, Shiro Kondo, el Director Haruo Ishikawa y otras autoridades de la Escuela Nagata visitaron por primera vez la residencia del embajador argentino en Akasaka. El 17 de noviembre del mismo año, el Embajador Enrique Ros visitó la Escuela Nagata. Los alumnos lo recibieron con cantos y bailes. Luego, el Embajador Ros visitó al Sr. Sakube Nomoto quien le regaló un dibujo realizado por la viuda del ex Primer Ministro de Japón Kantaro Suzuki.

El 30 de marzo de 1988, se presentó la solicitud para recibir la roca del jardín de la residencia del embajador argentino en Japón. La misma fue aceptada por el Embajador Ros. De esta manera se pudo erigir el Monumento en memoria de la amistad entre la República Argentina y la Escuela Nagata. La inauguración del Monumento se efectuó el 2 de junio de 1988, con la asistencia del Embajador Ros. En recuerdo de esta ceremonia, se designó a esta fecha como el "Día de la Amistad con Argentina".

El 23 de junio de 1995, el Embajador José Sanchís Muñoz entregó la Condecoración de Mayo al Sr. Sakube Nomoto de 100 años de edad. Los alumnos de la Escuela Nagata cantaron Caminito para festejar el cumpleaños del Sr. Nomoto.

Del 17 al 24 de febrero de 1998, se realizó en Tokio, la "Exhibición de Dibujos de los Alumnos de la Escuela Nagata", organizada por la embajada de Argentina en Japón. Para ello, se realizó un concurso de dibujo sobre el tema: Amistad entre Argentina y Japón en el que participaron todos los alumnos de la Escuela Nagata. La ganadora del primer premio pudo viajar a Argentina gracias a Iberia y Aerolíneas Argentinas.

El 6 de junio de 1998, se celebró el Día de Argentina por décima vez, con la presencia del Embajador Sanchís Muñoz y su Sra. Polly Ferman que efectuó un concierto de piano. Gracias al Sr. Isao Kawasaki (miembro de la comisión directiva de la Asociación Nipo-Argentina), estos festejos fueron transmitidos por la NHK.

El 2 de diciembre de 1998, en el Hotel Imperial de Tokio, se celebró el centenario del inicio de las relaciones diplomáticas entre Argentina y Japón con la asistencia del Presidente Menem, el Príncipe Akishino y la Princesa Kiko. Durante la fiesta, los alumnos del coro de la Escuela Nagata cantaron "Sakura" y "Caminito" en castellano. Poco después, el Presidente Menem se acercó a la conductora del coro, la Sra. Makiko Asoh, y le entregó un paquete. El regalo del Presidente fue una bandera argentina con el sol bordado en oro. En Japón existen sólo dos de estas banderas. Una está en la embajada de Argentina y la otra en la Escuela Nagata.

El 30 de noviembre de 1999, se inauguró la Biblioteca Akishino en el Instituto Nichia Gakuin de Buenos Aires. Asistieron entre otros, el Sr. Shuji Nomura de la Asociación Nipo-Argentina y 4 personas de la Escuela Nagata: el Sr. Hitoshi Nomoto (nieto del Sr. Sakube) y su hija Mayu, el Sr. Yoshikazu Koguchi y su hija Mana.

A partir de 2004, el Embajador Daniel D. Polski ha visitado la Escuela Nagata 5 veces en el Día de Argentina. El 7 de febrero de 2006, a invitación del Embajador Polski, alumnos de 6to grado de la Escuela Nagata visitaron la embajada.

En junio de 2007 el Embajador Polski trajo a un famoso intérprete de charango y se efectuó un mini-recital en la Escuela Nagata.

El 8 de agosto de 2008, la Fragata Libertad pasó por el puerto de Yokohama. Gracias a la gentileza del Embajador Polski, alumnos de 5to grado de la Escuela Nagata pudieron visitar el barco.

En la prefectura de Ibaragi, la Escuela Primaria Nagata es sinónimo de Argentina. Es un orgullo para la Escuela.

Si tratas de hacer algo diferente... (p. 7)

por Isao Kawasaki

Una hora con Irene Gashu, de padre argentino nisei y madre japonesa. Los que tratan de hacer algo diferente son mal vistos en Japón. En los restaurantes, no se puede pedir que cambien un plato del menú fijo. Viajó por todo el mundo pero quedó fascinada con Papúa Nueva Guinea. En febrero hará una exhibición individual de fotos.

El ataúd de Evita (p. 8)

por Hitoshi Narita

Eva Perón falleció en 1952. Su cuerpo fue embalsamado. Después de la caída de Juan Perón, el cadáver de Evita fue secuestrado y llevado a Europa. Cuando Isabel, la última esposa de Perón, asumió la presidencia de la nación, los cadáveres de Perón y Evita fueron colocados en una capilla de Olivos. En la actualidad, los restos de Evita yacen en el Cementerio de la Recoleta y los de Perón en Chacarita.

El gobierno de Cristina Fernández cumplió 1 año (p. 9)

por Yasuichi Arao

En el conflicto con el campo, el senado rechazó la suba de las retenciones y el proyecto no pudo convertirse en ley; el jefe de gabinete, Alberto Fernández renunció y fue reemplazado por Sergio Massa; se aprobó el plan de recompra de bonos nacionales; se anunció el pago de la deuda con el Club de París; se nacionalizaron las pensiones privadas; se creó el ministerio de producción y la presidenta participó en el encuentro de G 20.

Serie Melodías Memorables Parte 5 Recuerdo (p. 11)

por Hiroshi Ishikawa

Una de las melodías más representativas de Osvaldo Pugliese. La letra fue escrita por Eduardo Moreno. Al principio causó confusión porque en las partituras aparecía como autor de la música, Adolfo, el padre de Osvaldo. Por ser una melodía muy famosa, hay muchas orquestas que la incluyeron en su repertorio. La más destacada es la versión de Horacio Salgán. Muy buena melodía tanto para escuchar como para bailar.

協会の活動報告

1. 土屋義彦当協会会長が急逝

当協会の土屋義彦会長（元参議院議長、元埼玉県知事）が、昨年10月5日（日）急逝されました。

故人に於かれては、5年以上に亘り当協会の会長としてご指導いただき、その間地元埼玉に「埼玉・アルゼンチン友好協会」を立ち上げて当協会の事業を応援して頂きました。

故土屋会長のご功績、お人柄につきましては、本紙記事「故土屋会長を偲んで――追想録」にて、当協会の木島副会長兼理事長が詳述しております。

あらためまして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2. 当協会事務所業務時間の変更

平成20年11月1日から、協会事務所（新橋）の対応時間が**月、水、木曜日の13:00~17:00**に変更となりました。

3. アルゼンチン在住日系の方々が受勲

協会ホームページで既にご案内済みの通り、アルゼンチンでご活躍され、ご功績の高い下記の3名の方が、昨年秋の叙勲で受勲されました。

特に滝波様におかれましては、これまで当協会報「会報」にご投稿頂き、直接、間接にご協力頂いております方であります。

心よりお祝い申しあげます。

旭日双光賞
滝波　勇　様（元海外技術者研修協会アルゼンチン同窓会長）

旭日単光賞
高木　一臣　様（らぷらた報知編集長）

旭日単光賞
柳田　頼行　様（アルゼンチン柔道連盟最高審議委員）

春季2009「実用スペイン語」講習のご案内

アルゼンチン人講師による、好評を頂いているスペイン語の基礎知識と実用会話の春季講習が始まっております。

講習は、初級、中級、上級に分かれて、少人数クラスで、日本語を使わず、全てスペイン語で行い、楽しく和やかに進めています。

期中申込も受け付けています。詳細は同封の資料を参照下さい。

その他、お問い合せはお気軽に下記にどうぞ。

（社）日本アルゼンチン協会
Tel.03-3501-4684　　Fax.03-3595-3932
E-mail.argentina@nifty.com

イベントのご案内

当協会理事イレーネ賀集さん写真展

イレーネ賀集さん（当協会理事　弁護士　写真家　翻訳家）が、2月3日（火）～2月12日（木）に、「シンプルライフ・イン・パプアニューギニア（Simple Life In Papua New Guinea）」と題して、写真展を開催します。

パプアニューギニアの奥地、道路も水道も電気もない未開の村に一人チャーター・ヘリで訪ね、外国人としては初めての寝泊まり客として２日間。この村の人々の日常生活を紹介する個展です。

素晴らしく、感動的な写真の観賞が楽しみの写真展です。

Irene Gashu Photo Exhibition

会期： 2009年2月3日（火）～2月12日（木）
10:30~19:00（最終日は15:00まで）

会場： コニカミノルタプラザギャラリーB
無休/入場無料
〒160-0022
東京都新宿区新宿3-26-11　新宿高野ビル4F
Tel.03-3225-5001

展示内容詳細は、下記HPを参照ください。
http://konicaminolta.jp/plaza/schedule/2009february/gallery b 090203.html

協会ホームページの活用お願い　http://argentina.jp

アルゼンチンにかかわる興味ある情報やイベント案内を出来るだけタイムリーに会員の皆様にお伝えするように、上記ホームページ（HP）の掲示板に載せることにしております。

掲示板には、誰でも自由に入れますので、どうぞ気軽にご意見など掲示板にお書き込みいただき、協会、会員間の情報交換の場として活用ください。

「イベント案内」「掲示板」への迷惑書き込み防止のため、所定のパスワードを入力して閲覧して頂く方式に変更しております。HPフロント画面から、次の通り行い、ご活用下さい。

(1) 「イベント案内」、「掲示板」をクリックしますと、“ユーザー名とパスワードが必要です”との認証画面がでます。

(2) 「ユーザー名」欄および「パスワード」欄の両方に、「llao01」(半角英数)を入力し、「パスワードを記憶する」欄にチェック・マークを入れて、「OK」をクリックする。

(3) 次回目からは、認証画面で「OK」をクリックするだけで閲覧できます。

編集長よりの御礼

ポルスキ大使には、大変にご多忙の中、インタビューをさせていただき、その記事を掲載させて頂きました。いつもながらの大使のご厚意に対し厚く御礼申し上げます。

フロントページの写真は、ブエノスアイレス在住の小木曽モニカさんが撮られた、今フロリダ通りと共に賑わうプエルトマデロ地区の写真を使用させていただきました。小木曽さんには、時機を得て時々ブエノスアイレスの情報等もご協力頂いており厚く御礼申し上げます。

執筆・原稿につきましては、茨城県境町立長田小学校長羽田正美様、賛助会員の成田仁様にご協力を頂きました。

スペイン語のサマリー（Resumen en castellano）は、当協会理事のイレーネ賀集さんに作成していただきました。また、イレーネ賀集さんには、インタビューのご協力をも頂きました。

末筆ながら、この場をおかりしまして、皆様のご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

日本アルゼンチン協会会報　第53号
2009年2月9日発行

発行人　木島　輝夫（当協会副会長兼理事長）
編集長　加藤　勝巳（当協会常務理事）
編集発行　社団法人　日本アルゼンチン協会
〒105-0004　東京都港区新橋1-17-1
電話：03-3501-4684
FAX：03-3595-3932
E-mail：argentina@nifty.com
URL：http://www.argentina.jp
印刷　株式会社　イデア・インスティテュート